

刈谷市 歴史 博物館 NEWS

Vol. **16**
2024.07

Kariya city Museum of History NEWS

CONTENTS

Next Exhibition [次回展示] -----	1
Description [解説] -----	2
Column [コラム] -----	3
Column&Information [コラム&ご案内] ---	4

NEXT Exhibition 次回展示

|| 企画展「石器時代を生きる」

開催日 2024年7月13日(土)～8月25日(日)



▲中条遺跡出土の石器(当館蔵)

刈谷市では旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が発掘されており、これらの遺跡では石器もたくさん見つかっています。当時の人々にとって石器は生活道具の中心であり、なくてはならないものでした。石器は山や川などで採集された石を加工して作られましたが、時代の変遷によって作り方や使い方なども変化していきました。

本展では、刈谷市内や愛知県内の石器を中心に展示し、「石器時代」を生きた人々による巧みな技や知恵、資源利用などについて紹介します。

※記載内容は予告なく変更することがあります。

旧石器時代と縄文時代の石器

はじめに

夏季企画展「石器時代を生きる」では、人類が生活道具の中心として石器を使っていた旧石器時代と縄文時代の石器を中心に展示をします。

本稿では、後期旧石器時代（約4万年前～1万6500年前）と縄文時代（約1万6500年前～約2000年前）の石器について製作技術の変化を中心に紹介していきます。

後期旧石器時代の石器

後期旧石器時代の石器について紹介する前に、旧石器時代について説明をします。旧石器時代は3つの時期に区分されており、原人、ホモ・ハビリスなどが石器を作り始めた前期旧石器時代（約30万年前～約30万年前）、旧人、ネアンデルタール人が活躍した中期旧石器時代（約30万年前～約4万年前）、その後現在の私たちと同じ新人、ホモ・サピエンスが活躍した後期旧石器時代と続きます。日本列島では前・中期旧石器時代とされる確実な石器はまだ未発見であるため、基本的には後期旧石器時代に残された石器が主なものになります。

後期旧石器時代の特徴的な石器製作技術の一つに「石刃技法」と呼ばれる技術があります。石刃技法は「石刃」という縦長剥片を連続して剥離する技術で、同じ規格の石器を量産することができる技です。前・中期旧石器時代では一つの石から一つの石器、または数個の石器しか作ることができませんでした。後期旧石器時代になると石刃技法の開発により、原石の大きさにもよりますが、一つの石からたくさんの石器を作ることができるようになりました。石刃技法によって量産された石刃はそのままでも使用で



▲ 豊川市駒場遺跡出土の旧石器
(豊川市桜ヶ丘ミュージアム蔵)

いった狩猟具や加工具も作られました。

このことから後期旧石器時を代表する石刃技法は持ち運びに不便な原石を軽量の石刃にし、それを素

きました。さらに加工され、槍の穂先や肉などを切ったりするナイフ形石器、木を削ったりする削器、動物の皮を鞣す搔器、木や骨などに溝を彫る彫器と

材として複数の石器を作る、遊動生活を送った旧石器時代人の生活スタイルに適した技法であったと考えられます。

縄文時代の石器

縄文時代になると、押圧剥離技術による石器製作が発達したことや研磨技術を用いた石器などが作られるようになります。押圧剥離技術は旧石器時代終末に登場していましたが、縄文時代になると石鏃や石匙などの小形石器を製作する技術として発達します。押圧剥離は加工したい部分に鹿角の先端などを当て、圧力で剥離することで細かく複雑な加工を行うことができるので、石刃のように決まった形の剥片を素材にして石器作りを行う必要がなくなりました。これによって不揃いな剥片に細かな加工を施して形を整える石器製作が一般的になります。



▲ 刈谷市本刈谷貝塚出土の縄文石器 (当館蔵)

また、研磨技術も普及したことによって硬くて重たい石を石材とした石器製作も行えるようになりました。これによって作られた石器が木を伐採するための磨製石斧や身に着けるための装身具などです。このような大形で持ち運びに不便な石器や食糧の生産に直接関わらない石器が普及することも縄文時代の石器の特徴といえるでしょう。

旧石器時代から縄文時代にかけて約300万年という非常に長い時間幅があり、その中で人類の進化とともに石器製作の技術も進化していきました。長い年月をかけて技術が進化したことはもちろんですが、その時々気候の変化、動植物や当時の人々の生活スタイルの違いなども石器には表れています。単に技術が発展していくのではなく、周辺の環境に合わせた当時の人々の工夫を石器から読み取ることができます。

(当館学芸員 野村 啓輔)

COLUMN コラム

「大正新田開墾の沿革」との邂逅



▲ 歴史ひろば（常設展示室）にて展示されている「大正新田開墾沿革図」（左）と「大正新田開墾の沿革」（右）

刈谷市歴史博物館が建つのは「刈谷市逢妻町」ですが、この町名は逢妻川に沿った地域であることに由来します。江戸時代以前、この辺りは衣ヶ浦と呼ばれる入江が広がっていましたが、江戸時代以降土砂の堆積により徐々に埋まっていき、入江から川と湿地へ姿を変えていきました。このような土地は開墾に適しており、いわゆる「新田開発」が盛んに行われています。

熊村は刈谷城の北に位置し、熊野社があることからその名がつけられました。江戸時代には城内に入ることの許された「城付四ヶ村」の一つで、明治22年（1889）には高津波村と合併し逢妻村となりましたが、旧熊村としての繋がり深く、例えば消防組（現在の消防団）は熊と高津波で別に設置されています。なお逢妻村は明治39年に刈谷町へ合併されています。

江戸時代には各村で「若者組」「若衆連」などといった若者の集まりがあり、神事などの担い手となっていました。明治中期以降は補習教育などを行う青年会が各地で成立していきます。熊村は現在の刈谷市域では最も早く、明治15年に熊青年会が設立されています。青年会の活動は先述の補習教育の他、競技会や視察旅行、娯楽事業など多岐に亘りますが、明治40年代以降の「地方改良運動」（国家の発展を支えるため、町村の体制強化を目指すもの）の高まりとともに、労力として期待されるようになります。そこで熊青年会では、逢妻川沿いの荒地の開墾を目指すこととしました。

「大正新田開墾の沿革」は大正4年（1915）に開墾に成功した「大正新田」の由来を熊青年会が記したものです。明治38年に初めて新田開発が企画された

～熊青年会の想い～

ことや、開墾に至るまでの費用面や労力面での苦勞が記されています。特に大正2年8月3日の海嘯^{かいしゅう}（高潮）では植え付けた作物が全て流されてしまうという悲劇がありましたが、青年会一同は不撓不屈の精神で再度開墾を進めました。末尾には事業に関わった34名の氏名が掲げられており、彼らの誇らしげな姿が目に見えよう。

この「大正新田開墾の沿革」は古書店から購入し、展示に際し修理とクリーニングを施したもので、制作当時の色鮮やかな様子が再現されています。一方の「大正新田開墾沿革図」は地元から寄贈された資料ですが、開墾の過程が絵で描かれています。絵は熊出身の挿絵画家である河目悌二（1889 - 1958）を彷彿とさせる穏やかなタッチですが、海嘯の様子も描かれており、作物を失った悲しみも伝わってきます。この2点はいずれも「刈谷町熊青年会」の揮毫があり、内容も一致することから（対になるとまでは言い切れませんが）同時期に制作されたものでしょう。この文章と絵からは若者たちの力、そして事業を終えた歓喜の様子がひしひしと感じ取れます。



▲ 大正新田の跡地（推定）、現在はグラウンドとなっており、当時の姿をしるばせる痕跡はない

さて、この大正新田は現在のどの場所にあたるのでしょうか。地図に載っている「泉田川」「高津波川」などは現在逢妻川に合流しており、川の流れから位置を確定させることはできませんが、古地図と重ねたところ、刈谷市体育館の西側にあるグラウンド付近に比定することができます。今からわずかに110年前には博物館の近隣で新田開発が行われていたとは、まさに「土地に歴史あり」ですね。

（当館学芸員 長澤 慎二）

COLUMN コラム 収蔵品よもやま話

井ヶ谷古墳の鉄刀

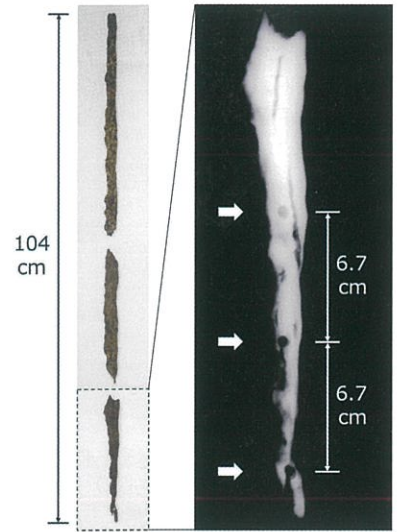
井ヶ谷町大塚には、かつてその字名のとおり大きな塚、すなわち古墳がありました。大正12年(1923)に土取りで削られてしまったため墳丘は現存しませんが、昭和36年(1961)に加藤岩蔵氏が刈谷東中学校社会科クラブと富士松北小学校社会科クラブの協力を得て残欠部の調査を行い、直径20mほどの円墳であったと推定されています。調査では須恵器や円筒埴輪などが出土し、境川流域では最も古い6世紀初頭に築造された古墳であることがわかりました。

この鉄刀は調査以前に現地で採集されたもので、古墳の副葬品であった可能性が高いものです。同町上ノ郷にある八幡社に奉納されたと地元には伝わっていましたが、長い間所在不明とされていました。

平成12年(2000)に市教委が八幡社の調査に伺った際、社殿の中から見つかりました。大きく3つに分かれ、錆びてボロボロになっていましたが、愛知県埋蔵文化財センターの協力で錆止めなどの保存処理を行いました。センターで実施したX線透過撮影の結果、刀の柄に装着するための目釘穴が3か所確認されました。

その後、平成13年に市へ寄贈され、現在は須恵器や埴輪などとともに当館で収蔵しています。

(当館専門員 鵜飼堅証)



鉄刀と目釘穴

簡単工作 (7月～9月)

土日祝日開催 受付は午後4時30分まで
 ・オリジナルうちわ 300円
 ・折り紙「おぼけちょうちん」 無料
 ・季節メニュー「風鈴」 500円
 (7月13日～8月25日期間限定)

◎ポイントカードを発行します◎
 簡単工作に参加し、ポイントを集めてグッズと交換しよう!
 ※8月11日(日)の工作はお休み
 ※7月30日～8月2日は平日開催



カレンダー

7	日	月	火	水	木	金	土	8	日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5	6						1	2	3
	7	8	9	10	11	12	13		4	5	6	7	8	9	10
	14	15	16	17	18	19	20		11	12	13	14	15	16	17
	21	22	23	24	25	26	27		18	19	20	21	22	23	24
	28	29	30	31					25	26	27	28	29	30	31

9	日	月	火	水	木	金	土	10	日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6	7				1	2	3	4	5
	8	9	10	11	12	13	14		6	7	8	9	10	11	12
	15	16	17	18	19	20	21		13	14	15	16	17	18	19
	22	23	24	25	26	27	28		20	21	22	23	24	25	26
	29	30							27	28	29	30	31		

- 企画展「石器時代を生きる」
- 企画展「刈谷生まれの雪の殿さま 土井利位」
- 休館日

利用案内

開館時間：午前9時～午後5時
 観覧料：歴史ひろば・お祭りひろば…無料
 企画展示室…企画展ごとに異なります

交通案内

- 鉄道** JR 東海道本線 逢妻駅 から徒歩約15分
 名鉄三河線 刈谷市駅
- バス** 刈谷市公共施設連絡バス「かりまる」
 東刈谷線・逢妻線
 「刈谷市体育館」下車 徒歩約3分
- 車** 伊勢湾岸自動車道
 名古屋南IC、刈谷スマートICまたは豊田南ICから約20分

※ 記載内容等は変更することがあります。詳細・最新情報は当館ホームページ、またはX(旧Twitter)をご確認ください。

編集・発行

刈谷市歴史博物館

KARIYA city Museum of History

〒448-0838 愛知県刈谷市逢妻町4丁目25番地1
 TEL.0566-63-6100 FAX.0566-63-6108
 URL : <https://www.city.kariya.lg.jp/rekihaku/>



◀ 当館ホームページ
 企画展・イベントの詳細や、博物館NEWSのバックナンバーを掲載しています。



◀ 公式X(旧Twitter)
 最新の情報やイベントの告知など、時々つぶやいています。

※ QRコードはデンソーウェーブの登録商標です。